

# 後援会だより

No.23 平成25年 4 月

## 目 次

平成24年度を振り返って	保健学科長	大友 和夫	3	
卒業・修了祝賀会祝辞	後援会会長	中道 博之	4	
祝賀会 謝辞	作業療法学専攻 4 年次	三浦 夏穂	5	
看護学専攻の動向	看護学専攻主任	平元 泉	6	
理学療法学専攻の動向	理学療法学専攻主任	進藤 伸一	8	
作業療法学専攻の動向	作業療法学専攻主任	石川 隆志	9	
看護学専攻の臨地実習について	看護学専攻実習委員長	伊藤登茂子	10	
理学療法学専攻の臨床実習の特徴	理学療法学専攻	若狭 正彦	11	
作業療法学専攻 7 期生の総合臨床実習を終えて	作業療法学専攻	高橋 恵一	12	
平成24年度保健学科教育賞を受賞して	看護学専攻	長谷部真木子	13	
平成24年度保健学科教育賞を受賞して	理学療法学専攻	齊藤 明	14	
<b>学生からのメッセージ</b>				
・ 1 年間を振り返って	看護学専攻 1 年次	佐々木紫帆	15	
・ 3 年間を振り返って	看護学専攻 3 年次	大久保朱華	16	
・ 1 年間を振り返って	理学療法学専攻 1 年次	鎌田 哲彰	17	
・ 4 年間を振り返って	理学療法学専攻 4 年次	加藤駿太郎	18	
・ 3 年間を振り返って	作業療法学専攻 3 年次	坂本 麻衣	19	
・ 学生生活を振り返って	作業療法学専攻 4 年次	小柳 美樹	20	
<b>サークル活動</b>				
・ サークル活動を振り返って	エンジョイリハ! 代表	理学療法学専攻 3 年次	青山 祐	21
・ 園芸を通じて	園芸サークルsaryo 代表	作業療法学専攻 3 年次	岡田 香	22
・ 釣りサークルの活動	釣りサークル代表	理学療法学専攻 2 年次	江森 怜央	23
・ 旅サークルの活動	旅サークル代表	理学療法学専攻 2 年次	江森 怜央	23
・ 初ステージ披露の大切さ	Lilac 代表	理学療法学専攻 2 年次	鎌田 凌介	24

・平成24年度の学務委員会活動	学務委員長 兒玉 英也……………	25
・平成24年度入学試験について	入試委員長 水沼 秀夫……………	26
・平成24年度FD講演会について	FD委員会委員長 大友 和夫……………	27
・天上の海 - 思い出の山旅 その4 幌尻岳 -	理学療法学専攻 岡田 恭司……………	28

### 新任教員紹介

・保健学専攻 母子看護学講座 母性看護学分野	工藤 直子 ……………	31
・保健学専攻 作業療法学講座 臨床作業分野	久米 裕 ……………	31

平成24年度秋田大学医学部保健学科入学試験実施状況……………	32
平成24年度日本学生支援機構奨学生数……………	32
平成24年度卒業生進路状況……………	32
平成24年度後援会決算書……………	33
平成25年度後援会予算書……………	34
平成25年度後援会役員・総代名簿……………	35
大学の行事等（平成24年4月～平成25年3月）……………	36
後援会会則……………	37



## 平成24年度を振り返って

保健学科長

大友 和夫

本年度、保健学科7期生看護学専攻78名、理学療法学専攻14名、作業療法学専攻17名、合計109名が卒業いたしました。卒業生が例年に比べ、少し少ない専攻もあり、少し心配です。大学院では、博士前期課程5期生看護学分野5名、リハビリテーション学分野5名、計10名、博士後期課程2期生女性小児発達支援学分野2名、生活機能・健康行動支援学分野2名、計4名が修了いたしました。後期課程4名の学位論文のテーマはそれぞれ、「日本の女子高校生の過剰適応傾向と心拍変動」、「臨床的視点からの、乳児の入眠時遠位・近位部皮膚温度勾配」、「脳性麻痺児に対する歩行の特異性に着目したホームエクササイズ効果」、そして「脳卒中非麻痺側上肢機能への注意機能障害の影響」でした。平成24年度の国家試験合格者（合格率）は、看護師67名（98.5%）、保健師77名（98.7%）、助産師4名（100%）、理学療法士14名（100%）そして作業療法士17名（100%）でした。全員合格を目指しておりましたが看護師1名、保健師1名の不合格者を出てしまい残念に思っております。

保健学科は24年度で創立10周年を迎えました。10年を振り返り最も大きな出来事は、やはり大学院の設置でした。修士課程につづき、博士後期課程が設置され、大学院博士前期課程、博士後期課程となりました。学部では成績優良者として看護学専攻の学生が学長から表彰されました。また、看護学専攻4年の学生と大学院博士前期課程の1年生それぞれ1名は世界的な社会奉仕団体の秋田ゾンタクラ

ブから学業優秀と社会活動の貢献により表彰されました。課外活動にも活発に参加する傾向が強くなり、成績優秀で数種目で数名の学生が学長表章を受けました。秋には学園祭にあたる第一回秋医祭が開催され、健康チェック「みんなで考えよう！これからの健康生活。」、模擬店、そしてミス&ミスターコンテスト2012などのイベントを中心に保健学科の学生も大いに活躍しました。学内の施設ではシミュレーション教育センターが完成し、様々なシミュレーションの機器が導入され、保健学科でも大いに利用し、スキルアップに役立てていただけることを願っています。

懸案の一つでありました国際交流活性化のために国際交流委員会を立ち上げることができました。委員会は初年度でしたが、様々な国際交流のための企画を立案していただきました。フィンランド、イタリアそしてフィリピンとの交流に向けての活動やブータン王立大との交流では6月に協定校の締結を行いました。10月にはブータンから3名の教員が来秋し、医学部で附属病院、シミュレーション教育センター、保健学科では特に授産学分野の施設等を見学していただきました。さらに、2月末から10日程の予定で看護学専攻の教員2名がブータンに行き、講演会等を開催し交流を深めました。夏ごろには再度約1ヶ月の予定で助産学分野の教員が研修に出かける予定です。

教員の研究活動もグローバル化が進み、6月と8月にはロンドンとウィーンの学会で理学療法学専攻の教員2名が発表し、8月と2

月には成人看護学講座の教員が国際会議に参加し、7月には基礎看護学講座の教員4名が米国サンフランシスコで看護師の抗がん剤取扱いにおける暴露防御に関する海外研修に出かけ、臨床看護学講座の先生がフランスで開催された学会に参加しそれぞれ大きな成果を上げました。

東日本大震災の支援として、国立大学協会の支援を受け、今年度で2年目を終了しました。支援の内容は保健学科の多くの教員が参加し、釜石市の幾つかの地区集会場などでの健康教室、ゲートキーパー養成講座、そして

ゲートキーパーフォローアップ講座を開講しました。健康教室終了の翌月からは定期的なサロンが立ち上がり、大きな成果の一つと考えられます。また、2年間のまとめと今後の支援の方向を考えるため釜石のリーダーを招き、秋田でフォーラムも開催されました。2年目からの支援が重要であるといわれております。本学としても3年目の支援を前向きにとらえ、さらなる支援を考えております。

今年度は保健学科の10周年記念行事も考えられております。次の10年に向け、更なる充実を目標にスタートできればと思います。

## 平成24年度秋田大学保健学科 卒業生修了生祝賀会祝辞

後援会会長

中道博之

保健学科卒業生の皆さん、大学院保健学専攻修了生の皆さん、本日はご卒業おめでとうございます。保護者並びにご家族の皆様にも心からお祝いを申し上げます。また、今日まで卒業生および修了生をご指導下さいました大友学科長先生をはじめ教職員の皆様、後援会を代表してお礼を申し上げます。

卒業生、修了生の皆さんはこれから社会人として働く方、あるいは学業をさらに続ける方それぞれが、新しいチャレンジに向けて決意を新たにされていることと思います。

この場をお借りして、53年生きてきて印象に残った出来事を1つだけ述べさせていただきます。平成7年1月17日、皆さんの多くが4歳のころ、阪神・淡路大震災が発生しました。その時、秋田県は避難所である神戸市長田区の長田小学校に医師、看護師などから成る

医療救護班を派遣しました。自分も第1班のメンバー12人の1人として長田小学校に行かせていただきました。当時、長田小学校には約600人の方が避難されており、学校の保健室を診察室として使わせていただき、放送室を救護班の休憩室として使用させていただきました。救護班が常駐して1週間ぐらいたった夜、お母さんが男の子を連れて診察室を訪ねて来ました。男の子は40度くらいの熱があったため、当時、第1班の班長であった現在脳血管研究センターセンター長の鈴木明文医師が治療に当たりました。鈴木先生は大事をとって避難所に泊まっていくようにと話をしました。しかし、男の子のお母さんは治療が終わったら子供を連れて自宅に戻ると言って聞きませんでした。鈴木先生が訳を尋ねると、皆さんも橋本大阪市長の報道で部落問題、同和問題という言葉を目にしたこ

とがあると思いますが、長田区でもある特定の地域に住む人は避難所にはいることができないことになっており、自分たちはその地域にすんでいるため、泊まる事はできないと答えました。お母さんには小学生の女の子と幼稚園の年長さんの男の子がいました。しかし、震災で女の子はなくなり、今は男の子しか残されていないため、避難所に来てはいけないルールを破り、避難所の人が寝静まった時間に来たとのことでした。話を聞いた鈴木先生は解熱鎮痛剤と抗生物質を処方して、お母さんは薬を受け取ると男の子を背負って自宅に戻って行きました。翌日、12時から2時までが救護班の休憩時間なのですが、鈴木先生は、男の子の状態が心配になり、看護師の方と2人で、歩いて30分位かかる男の子の家へ往診に行きました。鈴木先生は医療従事者としての使命感もあったと思いますが、鈴木先生の心を動かしたものは、子供を守ろうとするお母さんの必死な姿だったと思います。小さい頃、皆さんが病気をしたときに皆さんを守ってくれたのはおかあさん、あるいはおじいさん、おばあさんだったかもしれません。今日卒業を迎えることができたのは皆さんの努力の結果で

す。しかし、ここに至るまでは、大学の先生、まわりの友人、そして家族の支えがあったことも事実だと思います。1人の人と1人の人がお互いに支えあって漢字の人という字になります。今までも、そしてこれからも、いろいろな人に支えられて自分は生きていると言いますか、生かされているということを忘れないでいただければありがたいと思います。

今、日本は人口減少や少子高齢化などの問題を抱えています。しかし、国家の品格という著書の中で藤原正彦さんが述べているように、日本は礼節を重んじるすばらしい国です。この日本を担っていくのは本日卒業される皆さんです。どうか、高い志を持ち、謙虚な姿勢でコツコツ頑張り、そして感謝する心を忘れないで下さい。人生に100%ということはありませんが、高い志、謙虚な姿勢、感謝の心を大切にすれば、限りなく皆さんの夢に近づくことが出来ると思います。

最後になりますが、卒業生、修了生の皆さんのこれからの人生に幸多いことを願いました。お祝いの言葉とさせていただきますと思います。



## 祝賀会 謝辞

平成24年度卒業生代表 作業療法学専攻

三 浦 夏 穂

本日は、私たち卒業生のためにこのような祝賀会を催して頂き、心より感謝申し上げます。先ほど、卒業式を終え、私たちが期待と不安を胸に抱きながら大学生活をスタートさせたのがもう4年も前の事なのだと改めて感慨深く思っております。学科長の大友先生をはじめ、ご多用にも

かかわらず御臨席下さった皆様方、保護者の皆様方から多くの温かいお言葉を頂戴し、卒業生一同、喜びと感謝の気持ちでいっぱいです。

私の4年間の大学生活は、たくさんの人々に支えられてきました。特に実習の際には友人の存在の大きさを強く実感しました。辛いときは励

まし合い、言葉を交わすことでまた頑張ろう、と思うことができ、更に友人の努力に刺激を受けたことも多くありました。多くの個性豊かな才能溢れる友人と出会い、切磋琢磨し合う関係を築くことができたのは何事にも代え難い財産であります。ここで出会った友人たちとの思い出は語り尽くせるものではありません。また、学校の先生はもちろん、実習先の先生方、関係者の方々にも支えられ、実習を乗り切ることができました。このように多くの人とのつながりによって日々気づかされ、学ぶものがありました。

勉強だけではなく、趣味や余暇も充実しておりました。アルバイトに励んだこと、部活動で仲間と目標に向かって努力したこと、練習だけでなく、飲み会などで騒いだこと、また、登山やファミリーマラソンに参加するなど多くの事に挑戦したことも良い思い出です。大学生活において決して楽なことばかりではありませんでしたが、それも今では良い思い出であり、思い返せばよく笑った大学生活でした。このような様々な経験によって人間としても成長できたのではないかと考えております。

今後、社会に出て働く者、進学する者、それぞれの道に進むこととなりますが、人との関わりが重要となることは間違いありません。

大学生活で得た知識や経験、そして多くの人々との出会い、触れ合いなど、全てが自分自身の糧となり、自信となると共に今後の私たちにとって必ず役立つものになると思います。今後もそれぞれの新しい道で日々努力し、成長していきたいと思っております。

入学から今日に至るまでの間、講義や実習など、多くの面で私たちを見守り続け、時には厳しく、時には優しく御指導・ご助言くださった先生方をはじめ、お世話になった全ての方々に、この場を借りて深く御礼申し上げます。

そして、何よりこの4年間だけでなく、いつも私たちを見守り応援してくれ、ここまで育ててくれた家族の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。まだまだ未熟ではありますが、少しずつ恩返ししていけるよう、頑張っていきたいと思っております。

大学生活の中で学んだこと一つ一つを大切にし、秋田大学の卒業生の名に恥じぬよう歩んでいきたいと思っております。そしてまたいつか集まる日を心から楽しみにしています。

最後となりますが秋田大学医学部保健学科のますますのご発展を願い、そして諸先生方のご健康とご活躍を祈願し、卒業生一同を代表致しまして謝辞とさせていただきます。

4年間、本当にありがとうございました。



## 看護学専攻の動向

看護学専攻主任

平 元 泉

東日本大震災から2年が過ぎましたが、原発やがれき処理の問題など、被災地の皆様のご苦勞が続いていることに胸を痛める日々です。今年度は、4月の在学生ガイダンス当日

に爆弾低気圧と呼ばれる強風のため、停電や電車の運休などで登校できない学生もいました。また、秋には気温の高い日が続き、9月の保育園実習でプール遊びをするなど、例年に

はない体験をしました。その後は、一転して寒気に見舞われ、平年より寒い冬になり、自然の厳しさを実感する1年でした。昨年以降、防災意識が高まり、保健学科棟の耐震性や避難経路の確認などの対応もされています。

看護学専攻の動向をご紹介します。医学部保健学科看護学専攻平成24年度の卒業生（第7期生）は78名でした。国家試験の新卒受験者の合格率は、看護師98.5%（全国平均94.1%）、保健師98.7%（同97.5%）、助産師100%（同98.9%）と、いずれも全国平均を上回っていました。進路状況は、就職73名、進学4名でした。就職の内訳は、看護師63名（県内31名・県外32名）、保健師6名（県内2名・県外4名）、助産師4名（県内1名、県外3名）で、秋田大学医学部附属病院には23名が採用されました。卒業生が実習指導者として活躍する姿を見ることができ、頼もしく感じています。大学院博士前期（看護学領域）・後期課程（女性・小児発達支援科学分野）の学位取得者は、修士（看護学）5名、博士（保健学）2名でした。今年度の博士前期課程の臨床看護学分野では、がん看護専門看護師コースの第1期生が修了しました。昨年1月にがん看護専門看護師教育課程が認可され、多くの皆様のご支援を受けながら修了生を送ることができました。今後は認定試験の受験という関門が待っていますが、秋田県第1号のがん看護専門看護師の誕生が期待されるところです。

平成24年度の看護学専攻の教員の動向について、ご紹介します。平成24年3月に地域・老年看護学講座教授の柳屋道子先生、母子看護学講座講師の保田ひとみ先生、同助教の高倉弘美先生が退職されました。4月には、地域・老年看護学講座の鈴木圭子先生が教授に、母子看護学講座の成田先生が講師に昇任されました。母子看護学講座の助教として、工藤直子先生が着任されました。また、平成25年3月に母子看護学講座の助教として畠山飛鳥

先生が着任されました。本学の短期大学部や保健学科の卒業生を教員として迎えることは、学生への良い刺激にもなると感じています。

今年度の4年生は、平成21年度のカリキュラム改正が適用され、新たに統合看護実習1単位が加わりました。卒業研究論文の提出後、翌週から統合看護演習と統合看護実習が2週間実施されました。各分野の教員から構成されたワーキンググループで検討を重ね、新たな実習施設との交渉など、多くの準備が必要でした。実習施設の皆様のご協力をいただき、無事に実習を終了することができました。各分野で実習施設や実習方法は異なりましたが、卒業目前の時期に多様な経験ができたことで、卒業後に就業する看護職に対するより具体的なイメージを持つことができ、学生自身が課題に気づく機会になりました。教員にとっても、学生の実習を通して教育の成果や課題を見出す貴重な機会になりました。

国際貢献の役割が期待されることから、平成24年度から国際交流委員会が設置されました。平成25年2月には看護学専攻の浅沼教授と篠原教授を含む秋田大学関係者4名がブータン王立大学を訪問しました。今後、教員の派遣などを通して交流をすすめていく予定であり、国際的な教育・研究活動につながるものと期待されるところです。

一般社団法人国立大学協会震災復興・日本再生支援事業として釜石市での支援活動が昨年に引き続き採択されました。看護学専攻では佐々木久長先生を中心に、煙山先生、猪股先生が継続的に活動しました。3月にはフォーラムが開催され、釜石市の3名の職員に参加いただきました。保健学専攻の活動を高く評価していただき、今後の活動継続への後押しになりました。

後援会の皆様のご支援をいただいたことに、深く感謝申し上げます。今後ともご支援くださるよう、よろしく願いいたします。



## 理学療法学専攻の動向

理学療法学専攻主任

進藤 伸一

今年度の理学療法学専攻のようすを簡単にご報告します。

まずは学生たちですが、昨年度は、卒業生19名が全員国家試験に合格し、県内に7名、県外に12名が就職しました。国試対策を強化したことが、国試全員合格に結びついたようです。新入生の18名は、県内7名、県外11名、男女それぞれ9名で、勉強のほかに部活、サークル、ボランティア活動などに取り組んでいます。2年生は、引率教員の指導のもとで、白衣を着用して直接、患者さんに触れて評価や治療を行う実習を終え、その成果をみんなの前でプレゼンテーションしたばかりです。3年生は、4月からの16週間の総合臨床実習に向けて準備中。4年生は、国家試験を終え、あとは卒業式を待つばかりとなっています。

つぎに、最近の理学療法学専攻のトピックスを紹介します。

1つは、保健学科が開学して10年、つまり理学療法学専攻も10年になりました。開学5年目に大学院の修士コース、7年目に博士コースがスタートして、昨年、最初の博士が誕生したばかりでしたから、あっという間の10年という感じです。医療短大1期生は臨床20年を超える大ベテラン、保健学科1期生も臨床5年を超える中堅となって、それぞれの職場で力を発揮しています。何よりも嬉しいのは、臨床実習指導者として後輩を指導してくれるようになったことです。

2つめは、少し残念なことですが、今年度はこれまでになく留年する学生が多い年でし

た。国立大学の会議では、最近、学生のタイプが急速に変わってきたと話題になっていたのですが、いよいよ秋田大学にもその流れが及んできたようです。国立大学は、理学療法士免許の単なる付与機関であってはならないと思うのです。秋田大学は、国民の期待にこたえる「臨床家の育成」を目標に掲げていますから、その水準に達した卒業生を社会に送り出す責任があります。留年させて終わりでは教育とはいえませんので、新しいタイプの学生を育てるという課題にも、本気になって取り組まなければなりません。これまで築いてきた秋田大学の評価を下げることをないように、学生とともに努力したいと思っています。

3つめは、秋田大学では2010年から「がんと緩和ケアの理学療法」の授業を行っていることです。これは、私が2009年に6か月間、イギリスのホスピスで研修した内容を、ぜひ学生に伝えたいということで始めたものです。時間は15時間、老年期障害理学療法の中で扱っていますが、全国的に見てもめずらしい試みでだと思っています。学生の反応は予想以上に良くて、1年次の授業で読んだ日野原重明先生のエッセイに重ね合わせて、「いのち」そのものに関わる理学療法、「愛」のリハビリテーションの一つのあり方として受け止めているようです。

以上、理学療法学専攻のようすを簡単にご報告しました。今後ともみなさまのご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。





## 作業療法学専攻の動向

作業療法学専攻主任

石川 隆 志

最初に、平成24年3月卒業の作業療法学専攻6期生19名について報告します。19名中秋田県内就職者が11名、秋田県外就職者が8名で、秋田県内就職者が多いのはここ数年とほぼ同様でした。そのうち18名が国家試験を受験し、17名が見事に合格しました。また、既卒者1名も初志を貫徹することができました。残念ながら涙を呑んだ1名は平成25年度の国家試験に再挑戦すべく努力していますので、必ずや合格してくれるものと期待しております。また、1名は国家試験を受験せず自ら選択した職業に就きましたが、大学で得た知識や経験を生かしていただけるものと信じております。

さて、平成24年の4月には19名が10期生として入学してきました。11名が秋田県内、8名が秋田県外であり、前年と同じ割合でした。10期生は復学した1名を加え男性2名、女性18名、計20名のクラスになりました。

次に、大学院の動向ですが、平成24年3月に博士後期課程高齢者生活機能支援科学分野（現、生活機能・健康行動支援科学分野）のうち作業療法学に関わる領域から初の修了生1名が生まれ、博士（保健学）を取得しました。また、博士前期課程リハビリテーション科学領域作業療科学分野では3名が修了し、修士（リハビリテーション科学）を取得しました。仕事と学業を両立し立派な論文を書き上げて学位を取得した4名の努力に心から敬意を表します。また、平成24年4月には、博士前期課程作業療科学分野に3名、博士後期

課程生活機能・健康行動支援科学分野の作業療法学に関わる領域に1名が入学しました。博士前期課程の3名は学部を引き続き、博士後期課程の1名も博士前期課程からの進学でした。大学院における教育は学部教育と異なり、自らが研究テーマを設定し計画を立案し研究を進めていきます。その過程を通じて研究能力を身に付けていくのですが、臨床家としての可能性も広げる機会にもなると感じています。学部学生にも折に触れ、その意義も伝えていきたいと考えています。

教員の動向ですが、平成3年より医療技術短期大学部、保健学科と長きにわたって学生教育にご尽力いただいた石井良和先生が、平成24年3月末をもって離任され、4月より首都大学東京健康福祉学部作業療科学科教授に着任されました。それに伴い4月より保健学科1期生の久米裕先生が助教として専攻の教員に加わりました。久米先生が加わって専攻の平均年齢もかなり若返りましたので、若さと経験を融合して学生教育にさらに力を発揮していきたいと考えています。

最後になりますが、スマートホンや情報端末等の急速な発展は、学生の学習やコミュニケーションのスタイルにも少なからず影響を及ぼしていると感じることがあります。作業療法学専攻では学年担任制をとり学生個々に合った支援を心がけておりますが、どうかご父兄の方々におかれましても、目配りのご配慮をいただければ幸いです。



## 看護学専攻の臨地実習について —初の統合看護実習—

看護学専攻実習委員長

伊藤 登茂子

看護は実践の科学です。そして看護のはたらきは、人々が健康でより良く生きることをサポートすることにあります。人々の健康状態、生活、年齢など一人ひとりには実に多様です。適切なサポートが出来るようになるためには、多様な健康、生活、年齢、価値観等をどのように理解し、それに応じた看護をどのように提供するかの知識や技術を学ばなくてはなりません。数多くの専門科目の中でも、より实际的・体験的な学習である実習は、学生が最も主体的に臨み、大きな成果を得ている科目と言えます。

平成24年度には、平成21年度入学生から適用の「統合看護実習」（1単位）が、初めて4年次の12月に実施されました。これは、科目名にも表れているように、それまでの全ての学びを統合し、保健医療チームの一員となっていくための看護の実践能力を高めることをめざして行うものです。科目の目的には「ヘルスケアチームの一員として看護職の責任と役割を果たすための基礎的能力を養う」とあります。

看護の専門領域である、精神、老年、在宅、母性、小児、および地域の実習が、4年次の履修の多くを占めるわけですが、その他に卒業研究、進路の決定、国家試験という大きな課題に取り組まなくてはなりません。そのため、4年次のみチュートリアル制という、少人数の学生を1人の教員が担当する態勢で研究指導、履修指導、進路相談を行っています。学生の関心領域を基に学生主体で所属講座・分野を決めているため、統合看護実習でもそ

の所属を基本としながら、共通の目的・目標のもと、各分野の特徴を生かした興味深い内容の実習が展開されました。各領域の看護の先輩の実働をシャドーイングによって学ぶ場面も多く、自分が働くようになった時の姿を思い浮かべながら学びを深めているように見えました。少しでもリアリティーショックの軽減に繋がってくれたら、と思うところです。

統合看護実習に至るまでの実習では、自分の患者さんのケアの事だけを考えて行動していれば良かったが、スタッフになると複数の患者さんのケアや、治療、処置に責任があり、常に優先順位や時間的な効率を考えながら、いかに担当する患者さん全てに安全、安楽、安心をもたらすかを追求していきたい、という学生達のレポートを頼もしく感じながら読みました。

平成24年4月に1年次入学の学生から、さらにカリキュラムの改訂が行われており、看護師国家試験は全員が、保健師・助産師の各国家試験は選択を許可された学生が受験することになります。卒業要件を満たす履修基準から考えた際に、看護師国家試験のみを受験する学生にとっても履修単位が減ることの無いよう、専門教育科目の中での選択科目の幅が広がり、そして新たな実習科目が2科目（2単位）増えることとなっております。

実習は看護の知識と経験を統合し、問題解決思考や自己学習力を高め、他者とのコミュニケーション力も鍛えられる重要な学習です。心身ともに健康で臨めるよう、ご家族のご支援・ご協力もどうぞ宜しくお願いいたします。



## 理学療法学専攻の臨床実習の特徴

理学療法学専攻

若狭正彦

理学療法学専攻のカリキュラムは、理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則に準じて作られており、本専攻の臨床教育の特色としては、下記の3点が挙げられます。

- ① 4年間で25週間の実習を確保していること
- ② 臨床実習を1年から開始し、学年進行にともなって徐々に期間を長くしていること
- ③ 3年次の基礎臨床実習をクリニカルクラークシップによる指導で行い、4年次では患者担当制による指導を基本としております。

〔注〕：クリニカルクラークシップ (clinical clerkship) とは、秘書や丁稚を意味し、学習者は「業務を“手伝う”ことを通して仕事を覚える」という意味。臨床実習でいえば、指導者は自分の業務を実習生に手伝わせながら、その業務を大量に経験させ、習得させていく指導法と言われております。

もう少し、詳しく各学年で行われる実習を説明いたしますと、

1年次の基礎臨床実習Ⅰ（1週間）は、学生が初めて経験する臨床実習です。理学療法士になることへの動機づけを高め、2年次から始まる本格的な理学療法専門教育への導入を図ることを目的としています。大学受験から解放された1年生は、楽しい大学生活を謳歌することは良いことではありますが、やはり何のためにPT専攻に入学したのか、各々が目的を再確認し、自ら勉強する習慣を付けるには、この1年次から行われる実習はとても効果的となっているようです。

2年次には理学療法技術実習が行われます。

教員の引率の下、約1週間かけて初めて1対1で患者さんを評価します。評価後は、患者さんが抱える問題点を抽出し、その問題点を解決するため、どのような理学療法プログラムを計画するかを全教員と学生とで議論し合います。

3年次には基礎臨床実習Ⅱ（2.5週）、基礎臨床実習Ⅲ（4週）が行われます。この実習ではクリニカルクラークシップと言われる実習指導が行われます。上記にありますように、学生は指導者についてまわり、理学療法業務の手伝い多くを経験し学んでいきます。

そして最終学年の4年次には総合臨床実習Ⅰ・Ⅱ（各8週）が行われます。この実習はこれまで習得した知識・技術を統合・展開する機会であるとともに、臨床でなければ学べない患者への対応、実践的な技術、チームアプローチなどを体験的に理解する実習です。患者担当制で行われるため、より患者さんに深く関わるようになります。

このような臨床実習カリキュラムの下、学生は学問的な知識・経験のみならず社会人してのべき姿など多くの事を学べます。実習終了後は、学生の顔つきや態度に変化が見られ、一回りも二回りも大きくなって大学に戻ってきます。教員としてそのような学生を見ていてとても頼もしく思っております。

このように学生が学内外で有意義な学生生活を送ることが出来るのも、ご家族の皆様、後援会のサポートがあつてのことだと思っております。今後ともどうぞご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



## 作業療法学専攻 7 期生の 総合臨床実習を終えて

作業療法学専攻

高橋 恵一

今年度の作業療法学専攻 7 期生の総合臨床実習は18名が臨みましたが、2 期目で1 名が休学し、全員で実習を終えるということではできませんでした。

また、実習開始前に大きな怪我のために実習地の配置に配慮が必要な者がいたり、実習施設の都合で受け入れが困難となり、急遽他の施設に依頼したりと、今年度は例年になく実習関係の対応に追われた年だった気がします。

実習が終わるとすぐに報告会を行い、自分が行った対象者の方への評価から治療の一連の作業療法の流れの経過と考察を発表する機会があります。その報告の内容や態度によって我々教員はその学生が実習で何をどれくらい学んだのかをある程度窺い知ることができます。それは自分の報告だけでなく、他の学生の報告に対する質疑にも現れていて、自分の実習で多くを学び、吸収してきた学生は他者の報告にも率直に疑問をもち、活発に質問し意見を述べる傾向にあるようです。実習の成績は実習先からの指導報告書の評価だけでなく、そうした報告会の内容、態度も加味してつけていますので、学生は実習が終わっても気が抜けないようです。

3 期の実習を終えると息をつく暇もなく、卒業研究、就職活動、国家試験勉強にとりかかります。なかでも就職活動は自分の作業療法士としての領域を決定し、今後の人生に大きく左右する重要な選択を迫られる機会ですので、慎重に考えなければいけないことですが、この時期の4 年生にはあまりじっくり考

えているような時間はありません。そのような中で就職先を決定する大きな要因はやはり臨床実習での経験となります。身障、精神、老年期、発達、地域のそれぞれの分野・領域を経験したうえで自分はどの分野の作業療法士になりたいのか、3 期を終えたころにはある程度その答えがでていっているのではないかと思います。すでにほとんどの4 年生が就職先を内定させていますが、今年度は実習先だった病院・施設を就職先として決めた学生が多いようです。臨床実習は知識・技術を学ぶ場としてだけでなく、担当させていただく対象者の方をはじめ、指導者、その他のスタッフの方々との出会いの場であるともいえます。その出会いを通じて自分の目指す作業療法士像が作られるのだと思います。そう考えると実習の配置を決めることは大きな責任を感じる業務であると思っています。

最後になりますが、1 年生からの臨床評価実習にはじまり、4 年生の18週間の総合臨床実習に至るまで、学外で行われる臨床実習は教育に対する実習指導者及び施設のご理解とご協力により成り立っております。特に4 年次の総合臨床実習では大学を長期間離れての実習になりますので、学生の経済的・心理的な面などでの負担は大きく、ご父兄の皆様にも様々なご心配とご負担をおかけすることもあるかと思いますが、社会に貢献する作業療法士育成のため、何卒ご理解とご協力をいただきたく、今後ともよろしくお願い申し上げます。



## 平成24年度保健学科教育賞を受賞して

看護学専攻

長谷部 真木子

縁があり臨床の現場から教育の現場に来てから21年になります。受賞を機に振り返ってみると、随分長い間居ってしまったなあという思いです。当初は5年位で臨床の現場に戻るつもりでした。臨床現場では、毎日の仕事の中に小さな喜びや達成感がありました。しかし、教育現場では、中々そうはいかず、悶々とした日々を送ったことを懐かしく思い出します。実習に行っても、主体的に看護ケアはできません。それが私の役割ではないからです。講義をしても、皆が理解してくれたかどうかの手応えがありません。試行錯誤をしているうちにあっという間に5年が過ぎていました。そんな中、卒業した学生が臨床で活躍している姿を見た時に、今までに味わったことのない喜びや達成感を得ることができました。5年も経ってようやく看護教員の役割を実感できたのです。そこで、もう少し頑張ってみようという気になりました。

現在の所属は基礎看護学分野ですが、以前はほとんどの分野で実習指導をしていました。

特別養護老人ホーム、訪問看護ステーション、保健所、等等。でも実習指導とは名ばかりで、学生と一緒に様々な分野を学ばせて頂く良い機会だったと思います。また学生を見ていて、土台がしっかりしていないと、看護を学ぶ楽しさ、看護の素晴らしさを実感することは困難であることを感じました。そこ

で、基礎看護学の重要性を再認識することができ、もう少し教育の現場に居てみようという気になりました。

という、色々な理由づけで今に至っています。また、学生との年齢が離れて行く毎に、可愛さが増して、離れられません。

最後になりましたが、この度評価を受けた「フィジカルアセスメント」という科目は、『フィジカルイグザミネーション（診察手技）の基本的技法が実践できる』を目標に講義しています。3年生の選択科目で、前期前半だけの科目ですが、殆どの学生が受講しています。この科目を担当してからの8年間は試行錯誤の連続です。私が学生の頃には無かった科目です。1コマの中で出来る内容の精選、理解し易い教授方法、教材の活用方法、目標の設定等等、毎年、毎回、課題を抱えながらの講義です。大きな目標は掲げていますが、実際は目、耳、手を用いて人体の様子が分かることを体験し、ひとつでも驚きや楽しさを持って貰えたら、嬉しいという思いで実施しています。自己学習に委ねる部分が大きいので、そのきっかけになればとも思います。なお、私自身はこの講義を苦しいながらも楽しんでます。それ故に今回の評価は今後の励みにもなりました。評価してくれた学生さん、そして一緒に指導に入ってくれている教員の皆様に感謝申し上げます。



## 平成24年度保健学科教育賞を受賞して

理学療法学専攻

齊 藤 明

教員として保健学科に赴任して3年になりました。まだまだ教育者としての技術もなく、日々修行の身でこのような賞をいただきましたことを大変光栄に思いますが、同じくらいの気持ちで恐縮しております(松井秀喜さん、拝借して申し訳ございません…)

教員1年目の授業は右も左も分からず、ただただ前任の方から引き継いだ内容を学生に伝えることで精一杯でした。特に最初の数回は授業を終えるとフルマラソンを走りきったかのような疲れを感じたことを今でも覚えています。そのような状況であったため、どうすれば学生により興味を持ってもらえるか？また理解してもらえるか？などと考える余裕はありませんでした。あの時の学生達、本当にごめんなさい。しかし1年目の授業を全て終えた頃に漠然と「自分の授業はこれでいいのだろうか？」と考えるようになりました。医療者としての知識や技術、また教育者としての技術は他の先生に到底敵うはずありません。したがって私の学生時代や大学院で指導を受けた先生方のスタイルをそのまま真似してもよい授業にはならないことは明白であり、自分に合ったスタイルを確立していく必要があると強く感じました。

そのような自分探しの旅はまだ始まったばかりで、道に迷ったり立ち止ったりの連続ではありますが、ぶれることのない2つの道標を見つけました。1つは「学生に近い年齢だからこそ共感できる部分を伝える」ということです。今、学生が授業で感じている疑問は

恐らく他の先生方も昔感じていたことかもしれません。また実習や臨床に出ておち当たった壁は、近い将来学生が同じ経験をするかもしれません。こういった事は学生に年齢が近ければ近いほど、臨床を離れて日が浅ければ浅いほど共感できる部分が多く、またアドバイスしたことが受け入れられやすいのではないかと考えています。2つ目は「常に考え、常に臨床を意識した授業にする」ことです。臨床に出て2～3年目の頃、日々の忙しさを理由にあまり考えず、淡々と同じ業務を繰り返す自分がいました。それと同時に、学生の時習った解剖学や運動学等の専門基礎科目が大切なのは理解しているが、それを活かさなくても業務が成り立っていることに大きな疑問を感じていました。そんな私に救いの手を差し伸べてくれたのが、当時他の病院から異動してきた先輩でした。彼の指導により専門基礎科目と融合することで今まで見落としていた部分が見え、考え方や提供するサービスの質が変わったのを実感しました。私も学生にとってその先輩のような何か変わるきっかけを与えられる存在でありたいと思っております。終わりのない旅ですが、今後も迷走しながら努力を重ねていきたいと思います。

最後になりますが、今回の受賞にあたりこれまで真摯にご指導いただきました教職員の皆様、そして共に充実した授業を作り上げていくために様々なアイデアを提供して下さった学生の皆さんに深く感謝申し上げます。

# 学生からのメッセージ



## 1年間を振り返って

看護学専攻1年次  
佐々木 紫 帆

この1年間を振り返ってみると、初めての一人暮らしや大学生活など、何もかもが新鮮で充実した毎日でした。しかし、入学当初は、新生活への期待よりも、不安が大きかったように思います。

大学は、高校までとは異なることが多々ありました。授業は1コマ90分と長く、授業形態ひとつをとっても、スライドを用いた大人数での講義形式のものから、少人数で演習形式のものまで様々あり、「大学」という環境に慣れるまでに、非常に時間がかかりました。特に、自分で自分のカリキュラムをつくることが大変でした。単位数や必修科目との兼ね合いも考慮しながら取舍選択するのは、とても難しかったです。とりわけ教養教育科目では、幅広い分野の中から自分の条件に合った授業を見つけるのに苦労しました。

1年次では、手形キャンパスで教養教育科目を学びました。何よりも他学部の学生と接する機会が多く、自分とは違った考え方、視点に触れることが幾度もありました。中でも印象に残っているのは、生命倫理の授業です。生命倫理の問題点について各自の意見を述べる際には、少人数ということもあり、積極的な意見交換ができたと思います。自分では思いつかなかった面から意見する人もいたため、1つ

の論点を多角的に捉えることができ、深く考えさせられた授業でした。

一方、本道キャンパスでは専門教育科目を学びました。1年次の専門教育科目は今後の学問の基礎となる重要な科目でした。初めての分野で日々新たな発見があり、楽しく意欲的に取り組むことができました。その反面、内容が難しく、時にはくじけそうになりましたが、友人たちのアドバイスのおかげで乗り越えられました。

夏休みに行われた障がい者福祉援助実習においては、はじめは利用者の方が何を伝えたいのかがわからず、戸惑ってしまいました。けれども、施設の職員の方々が利用者に関わる姿を見て、観察して意図することを読み取り、行動することが大切だとわかりました。

また、この1年はたくさんの方々との出会いの1年でもありました。サークル活動では、以前から興味があった手話部に入りました。サークルに入ったことで、先輩方や他大学の手話部の方々との交流の場を持つことができました。さらに、実際に手話を使用する方々とコミュニケーションもとれました。そして、共に学ぶ友人たちとの出会いがありました。

1年を通して、今までよりも広い視野で物事を考えられるようになったと思います。加えて、

看護について今まで以上に関心を抱きました。2年次になると、より専門的な授業が待っています。病院での実習も始まります。看護とは

何なのか、看護とはどうあるべきなのかを考えながら、仲間と共に看護という学問に励んでいきたいです。



### 3年間を振り返って

看護学専攻3年次

大久保 朱 華

私は教養を学びながら助産師になることを目標にしてこの大学に入学しました。今、振り返ってみるとこの3年間は充実していた毎日であったと思います。1年生のときは一人暮らしになれることができず、遠い実家の母と毎日電話で話し合ったり、一人暮らしの友達を集めて晩御飯を食べたりと新しい自分の生活スタイルを築くのに精いっぱいでした。そんな中でも、講義や障害者実習を通して看護を学び、また将来の自分に思いをはせて勉学や部活動、アルバイトに励んでいました。2年生になり、専門的な勉強を始めると、自分は本当に看護に携わる人間なのかと悩みました。将来について先生に相談したこともあります。先生や、周りの友達が一緒にやってみよう、頑張ろうと励ましてくれたおかげで今の自分があると思います。大学に入ってから、人の温かみや優しさを特に感じるようになりました。自分一人ではできないことでも、周りの友達と協力して行うことで達成できることもあります。自分のいる環境の中で、小さな目標を決めて行動することが大切だと感じた1年でした。3年生になり、実習という大きな壁がありました。実習は思いのほかつらく、大変なものです。患者さんの状態の急変に立ち会ったとき、どうしたらよいかわからず茫然と立ちつくしてしまった

こともあります。医師や看護師が素早く症状に対応し、治療を進めていくなかで、自分は患者さんに対して何ができるのか、周りから何を求められているのかを考えて、次の行動をとることが大切だと感じました。症状が安定してから、担当看護師さんから個別にご指導いただいたり、看護師さんから出された宿題を図書館で調べたりすることで、エビデンスのある看護、必要とされているケアを学ぶことができましたと思います。実習を終わって、看護に向いていないと悩んでいた自分が懐かしく思えましたし、より看護というものに魅せられました。患者さんと接することは、人と接することと同じで、ケアされる側もする側も支えあって関係を築いているのだと思います。その中でお互いの信頼がより関係を強固なものにしているのではないのでしょうか。

助産師になる夢も、選抜コースの一員となり、現実に近づいてきています。4年生からはパンをかじる暇もなく勉強と実習に励むと思いますが、人との信頼と支え合いを忘れずに、また周りの友達と協力して国家試験まで乗り越えていきたいと思います。将来は自分の技術を地元にもって帰り、衰退しつつある地域の周産期医療に貢献し、また地域の妊婦にこんなこともできると知ってもらい、お産をより主



体的なものにしたいと考えています。  
残りの1年を悔いのないよう過ごし、助産師、

看護師、保健師の国家試験に合格することが  
今の私の目標です。



## 1年間を振り返って

理学療法学専攻1年次

鎌田 哲彰

この一年間を思い返してみると、様々な経験をした一年であったというのが率直な感想である。自分は一年間浪人生活を過ごしていたこともあり、理学療法士を目指し始めて三年も経っていることを考えると時間の経過は本当に早いものだと痛感させられる。浪人していた頃に比べると入学してからの時間はあっという間に過ぎ、気が付けば大学生活の一年目が終わりそうな時期である。それも共通の目的をもった仲間と出会えたことで充実した生活ができているからであろう。

講義は専門用語が頻繁に出てきて、新鮮さを感じると同時に戸惑うことが多々あった。また試験が近くなるたびに自分は学んだことを理解できているか不安にもなった。しかしながら友人たちと共に勉強し、教え合いながら疑問を解決することに少なからず楽しさを覚えた。私たちは一学年18人という少ない人数ではあるが、一人ひとりが個性豊かで自分の意見を持っている。それでも独りよがりになることはなく、他人の意見に耳を傾けることができる優しい集団である。そのこともあってわからないことは遠慮せずに聞きあえるととても良い雰囲気の中で学ぶことができた。座学以外では、街中を車椅子に乗って回る障害体験はとても貴重な経験であった。車椅子に乗った状態で健常者と話すときに感じた、見下ろされることによる威圧感は今でも忘れられない。障害者が普段感じているもの

を共有できた気がした瞬間だった。目線の高さの違いだけで多くの物事が普段と異なる風景になることを、身をもって経験できた素晴らしい機会だった。そして2月中旬に行った基礎臨床実習では実際に医療の現場へ行き、患者さんと触れ合い、実習指導者の先生のリハビリを目前にして、自分の中の意欲を高めることができた。自分が目指している世界はとて深い世界で、半端な覚悟では決して務まらない世界であると感じ、自分の知識・技術不足を痛感した。“自分の努力は将来の患者さんのためである”と言われた意味を実感できた実習でもあった。

この一年間は冒頭でも述べたとおり、本当に多くの経験をした一年であった。上で述べた学習面のことに加え、人生初のアルバイトにも挑戦し、お金を得るために重ねる苦労を体感した。臨床実習の初日では過度に緊張して自分の意見を発言できないこともあり、精神面の未熟さを知った。この一年間で私は成長したと確信している。今後、より専門的な授業になってきて疑問・不安・悩みも増えてくることだろう。その壁を乗り越えて成長できるように努力しつつも、残りの学生生活も残りわずか三年しかない。私は17人の仲間たちと共に様々な経験をしながら成長していきたいと考えている。



## 4年間を振り返って

理学療法学専攻 4年次

加藤 駿太郎

入学してから4年が経ち、今卒業の時を迎えようとしています。入学当時は、何もかもが初めてで不安と新鮮さが入り混じった感情を抱きながら毎日を過ごしていました。そして、レポートやテスト、臨床実習、卒業論文、国家試験対策など、目の前の課題に無我夢中で取り組んできました。クラスメイトと夜明けまで勉強したり、時には遊んだりした日々は今となっては良い思い出です。この4年間で、もちろん辛いことや苦しいこともありました。それ以上に楽しい思い出がたくさん出来ました。また、先生方の姿や熱意溢れる講義、お話を聞くことで、自分がなりたい理学療法士像や理学療法士がどうあるべきかなどについて深く考えることが出来ました。これらは明確な答えが存在するものではありませんが、自分が理学療法士として歩いていく中で自分なりの答えを見つけ出していきたいと思います。

理学療法士に限らず、医療職は人の支えになることを生きがいにすることが出来る素晴らしい職種であり、私が医療という道を進み始めた理由もそこにあります。実際の理学療法は、高校時代に想像していたものとは比べ物にならないほど奥が深い分野で、自分が理学療法士として患者さんに的確な医療を提供出来るか不安に思う気持ちもあります。しかし、医療を通して人の支えになりたいという気持ちは入学当時以上に強く、より明確なものとなりました。今までたくさんの人達に支えられてきた分、これからは理学療法士として少しで

もたくさんの人達の支えになりたいと思っています。また、そのためにも日々の努力を怠らず、将来立派な理学療法士になることで、私を支えてくれた人達の恩にも報いることが出来ればと思います。

「人は人によって支えられ、人の間で人間として磨かれていく」という言葉がありますが、本当にその通りだと思います。人は支え合うことで、困難に立ち向かい大きな壁を乗り越え、より強く生きていくことが出来ると思います。私が今日という日を迎えられるのは家族や友人、先生方など今まで出会ったたくさんの人達のおかげです。私自身の努力では今という時を迎えられていなかったらと確信しています。今の私はそれだけたくさんの支えの上に成り立っており、また、そう思えるほどたくさんの素晴らしい出会いがあったということに改めて嬉しく思います。

最後になりますが、今日まで私を支え続けてくれた家族、友達、先生方には本当に感謝しています。ありがとうございました。また、4年間辛いことや楽しいことなどを分かち合いながら過ごしたクラスメイトとの別れの時を目前にして、寂しいという思いが募りますが、たとえ距離が離れても今まで共に過ごした時間は一生自分の中に残り、これからの人生の糧になると信じています。またいつか、立派な理学療法士になって再会出来る日を楽しみにしています。

## 3年間を振り返って

作業療法学専攻3年次

坂本麻衣

4月から自分が4年生になるのかと思うと、正直なところあまり実感がありません。そのくらい、私の大学生活はあっという間で目まぐるしいものだったように思います。これまでの3年間を振り返ってみると、実に様々なことがありました。

3年前の春、念願叶って第一志望の秋田大学に入学した私は、心を躍らせながら秋田の地にやって来ました。親元を離れての生活には不安もありましたが、作業療法士になりたいという目標と希望に満ちあふれていました。

大学生活はそれまでの生活とは異なり、毎日が初めての連続でした。学習する内容は日々高度で専門的なものとなり、戸惑うこともありました。自分はこの勉強を続けていくことができるだろうか、自分は作業療法士に向いていないのではないかと思い悩むこともありました。しかし、そんなときに支えてくれたのが入学して出会った仲間たちです。20人という例年に比べ少し賑やかな私たちの学年は、同じ志を持ち、いつも仲が良く何でも相談できるような関係です。悩んでいた時や壁にぶつかった時、いつも周りの友人たちに励まされ、助けられました。私の大学生活において、この友人たちの存在がかけがえのないものとなりました。

3年生では、学外の施設で実習を行うことも多くなり、作業療法士という職業と向き合う機会が増えました。医療現場の空気を肌で感じ、己の技術や知識の未熟さを痛感して落胆することも多々ありました。しかし落ち込む

ばかりではなく、もっと勉強して患者さんのために充実した医療を届けたいという熱い思いも生まれました。実際に患者さんと触れ合い、笑顔や感謝の言葉を贈られるとやりがいや充実感を感じることもできました。患者さんや作業療法士の方から「立派な作業療法士になってね」と激励されると、感動して涙が出ました。実習を通して、多くの得難い経験をする事ができ、作業療法士になりたいという思いはより一層強くなりました。

これまでの3年間を一言で表すと、まさに全力疾走という表現がぴったりだと思います。あっという間ではありましたが、あっという間の一言では終わらせられないほどに色濃く充実していました。そして、これまでの大学生活で得た経験が、これから先の糧になっていくように思います。

4年生は、実習、卒業研究、就職活動、国家試験など、これまで学んできたことの集大成となる1年間だと思います。4年生になるという現実を目の前に、果たして自分にやり遂げることができるのだろうかという不安が、今の心境の大半を占めています。同じ講義室で肩を並べて勉強した仲間たちと離れ、自分一人の力で頑張らなければいけない場面も多くなります。ですが、これまで幾多の試練も乗り越えてこられた私たちなら、きっと大丈夫だと信じています。これからも仲間たちと支え合い、励まし合いながら、全力で走り抜けていきたいと思います。そして一年後の春を、20人が笑顔で迎えられれば幸いです。



## 学生生活を振り返って

作業療法学専攻 4年次

小柳美樹

「何かを作ったり、遊びの要素を取り入れたりしながらハピリができるなんて楽しそう!」。高校生の頃、初めて作業療法士という職種を知った時、私は単純にこう感じたのを覚えています。しかし、大学に入学し、実際に学んでみると、レポートやテスト、実技の練習等盛りだくさんで、ただ楽しいだけではないことを強く実感しました。特に4年生での臨床実習では、担当ケースを持つことで、大きな責任感を感じました。人それぞれ目指すゴールは異なる中で、患者が望む事は何か、どうすればゴールを達成できるか、どんなプログラムを立てれば参加してもらえるか、必死で考えました。今、実習を振り返ると、辛かったというよりも、机上の学習だけでは学べないことを、肌で、頭で実感する機会であり、一番の学びの場だったと思います。

あったという間だった4年間を振り返ると、いつも思い出の中にはクラスメイトがいます。一緒に夜までテスト勉強やグループワークの課題をしたり、実習中の週末は友達に会えるのが楽しみで図書館に行ったり、鍋っこやバーベキューをしたり、一緒に旅行に行ったり…。思い出すときがありません。20人にも満たない少ない人数だからこそ、1人1人と深く関わることができ、7期生のメンバーだからこそ、4年間を乗り越えることができたのだと思います。先日、卒業旅行に行った際出会った人に「大

学の友達是一生の友達だから大事にしろ!」という言葉頂き、その言葉が強く心に残っています。4月から秋田を離れ、新天地で仕事をする人もいますが、「大学の友達是一生の友達」という言葉を忘れずに、辛い時は4年間苦楽を共にした仲間を思い出してほしいと思います。

私たちは、4年間大学で知識と技術、そして作業療法士としての心構えを学び、国家試験を終えた今、4月からやっと作業療法士としてのスタートラインに立つことができます。高校生の頃に抱いた作業療法士のイメージと、今私が考える作業療法士のイメージは少し変わりました。今は、作業療法士とは患者さんの人生のサポート役であると感じています。そのために、作業や遊び、環境等工夫次第で使えるものは何でも取り入れていく幅の広い職業であり、それが作業療法士の1つの魅力だと感じています。

医療の世界は日々日進月歩であり、これからも一生懸命さを忘れず、新しい事をどんどん学んでいこうと思っています。最後になりましたが、たくさんの方々に教えて頂いた先生方、支えてくれた家族、実習で出会ったたくさんの方々、そして、大好きなクラスメイト、たくさんの方々に支えられて無事に学生生活を終えることができました。

4年間、ありがとうございました。

# サークル活動



## サークル活動を振り返って

エンジョイリハ! 代表

理学療法学専攻 3年次

青山 祐

前年度に引き続き、今年度も皆で映画を鑑賞して感想や意見を言い合って、お互いに考えを深め合うという活動が中心でした。今年度は『シッコ』と『モーリー先生との火曜日』を観ました。『シッコ』では、アメリカの医療保険制度の問題点とそれにより人々の生命がおびやかされていることを知ったり、感じたりし、『モーリー先生との火曜日』では、死が迫っている先生から「人生とは、愛とは何か」といったことを主人公と一緒に学び、見終わった後に皆で話し合って考えを深めていきました。活動回数自体は少なかったものの、1回1回は大変充実していたと思います。

このエンジョイリハ!サークルは、メン

バーが皆4年生になり実習や卒業研究などで忙しくなるということで今年度をもって解散したいと考えております。このサークルを立ち上げて、1回1回の活動を企画していくことで私自身学ぶところが多々ありました。また、参加した皆も名作の映画に触れ、お互い話し合う過程でそれぞれに学びがあったのではないかと推察します。今後もサークルという形ではありませんが、似たようなことを機会を作って行っていきたいと思えます。

最後になりますが、忙しい中顧問を引き受けてくださった進藤先生、積極的に参加してくれたサークルのメンバー、そして後援会の皆様に感謝の意を述べたいと思えます。

## 園芸を通して

園芸農業クラブ saryo 代表

作業療法学専攻 3年次

岡 田 香

例年、作業療法学専攻 3年次が中心となる庭の活動で代表となったのが私でした。

去年から活動に参加してきて、先輩が少数でも頑張っている姿を見て、大変そうだと感じていた。そのため、今年度はより多くの人たちと活動したいと思い、活動をしてきた。しかし、3年次は授業や実習が昨年度とは比べ物にならないほど忙しく、他学年と一緒に活動することが難しかった。その中でも、声をかけると集まって一緒に活動してくれた同学年をはじめ、他学年の協力があって、今年度の活動を終えることができたと思う。

今年度は、初代の先輩が作成したドームが壊れたり、イルミネーションの不備などがあり、思うように活動が進まなかったが、行き詰った時はいつも先輩や先生方に助けていただいた。

また、例年の課題でもある「他の専攻の学生にも利用してほしい」ということに関しては、なかなか認知されていないようだが、まずは作業療法専攻の学生が利用していくことによって認知されていくのではないかと。そのための活動として、庭をグループワークの一環として利用してくれた同学年に感謝したい。他の専攻の学生に利用してもらうということは、簡単なことではないが、この課題を後輩たちに託したい。

園芸や活動をしていく中で、植物を育てていくための知識やグループで活動することの大切さや喜び、計画することの重要性などを学ぶことができたと思う。

最後になるが、協力して下さった先生方、諸経費・活動場所等提供して下さる大学側に感謝の意を述べて終わりたいと思う。



## 釣りサークル活動について

**釣りサークル** 代表

理学療法学専攻2年次

**江森 怜央**

先代会長からバトンを受け取り、私がこの釣りサークルの会長となりました。昨年度は、カリキュラムの都合上でなかなか時間をとれず、活動がままならなかったのですが、今年度から積極的に活動していきたいと思っています。朝早くから県内外問わずその日の獲物を求めて出発、存分に海と対話し、揺らぐ水面に心を委ね、日ごろの生活や勉学で疲れた体を癒しましょう。釣りを終え、帰ってきても釣りサークルの活動は終わりません。その

日の収穫を皆で調理し、それを肴に持ち寄ったお酒を飲み交わしてさらにメンバーの交流を深めていくことを含めて活動とします。

私をはじめとした他の多くのメンバーが、釣りを経験したことはありません。しかし、私たちには素晴らしい先生がいます。先生のもと、メンバー間で補い合いつつ釣りを楽しんでいきたいと思っています。

以上をもって活動の紹介とさせていただきます。乱筆拙文お許しください。

## 旅サークル活動について

**旅サークル** 代表

理学療法学専攻2年次

**江森 怜央**

メンバーからの希望と日程さえうまくいけば、それこそ県内外どこへでも行きましょう。旅サークル会長としての私の理念です。交通手段、行き先、なんでもいいでしょう。楽しそうな気配のするところへ、楽しいメンバーと一緒に、更なる友情と思い出を築きに行きましょう。楽しむことはとても大切ですが、財布と相談することは忘れてはいけません。懐に余裕を持ちましょう、すると普段の生活にも余裕が生まれ、遠くまで出かけることなく毎日の生活の中に新たな発見が

あり、旅のような楽しみが生まれるかもしれません。私が会長職を釣りサークルと兼任しているのですが、似たようなこととなってしまいますが、今年度は積極的に活動していきたいと思っています。思い出の1ページを作ると言うように、2ページ3ページと皆で作っていき、後に振り返ってみたときに学生生活の立派なアルバムが完成していることを願います。

以上をもって活動の紹介とさせていただきます。乱筆拙文お許しください。



## 初ステージ披露の大切さ

Lilac 代表

理学療法学専攻 2年次

鎌田 凌介

今年度は前年に比べて大きく躍進した年になった。前年は結成したばかりで何をしたらいいのかひたすら悩んでいたが、今年度からは秋医祭が復活するというので、その舞台に立とうということになった。

練習の時間は限られていて、最初は各自で練習するという形になった。しかしそれぞれの用事があり、あまり練習に時間が割けていないようであった。自分としては、やるからには全力でやりたく、ステージプランやTシャツの作製などを積極的に行った。費用は高くなったものの、個人的ではあるがかなり良いデザインとなった。実際に本番を迎えてみて、正直なところ全体としてクオリティー

はあまり高くないと感じた。しかし、初心者が多いということからしょうがないだろうと考え、なんといっても楽しめたから良いのでは、と考えるようにした。見に来てくれた友人にも「良かったよ」などの感想も言ってもらえた。

今年度はこの活動しか行うことができなかった。しかし来年度になるとそれぞれが進級し、学業の面でも忙しくなってくる。活動も必然的に制限されるのではないかと考えられる。しかし、そんな忙しい中でも少しでも活動に参加して「ダンスって楽しいな」と思ってくれるような環境を作っていきたいと一年を通して考えるようになった。





## 平成24年度の学務委員会活動

学務委員長

兒 玉 英 也

3月になって半ばを過ぎ、ようやく暖かい春の日差しが実感できるようになりました。それにしても、今年は長くて厳しい冬でしたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。さて、恒例のこの「後援会だより」のご挨拶ですが、学務の業務の今年度を総括すると、概ね大きな変化のなく終わった一年ということになるでしょうか。

まずは、学部教育から。前年度に、基礎教育の2年次に英語の必修科目が導入されることになり、今年度より手形の英語の先生が本道キャンパスに赴いてきて講義を担当していただきました。これは意味で画期的なことであり、基礎教育の大きな変化ともとらえられます。また、専門科目にもS評価と評定平均値（GPA）が導入されることになり、それらが実際に施行された元年ということになります。概ね混乱なく導入されたものと思われ。さて例年この時期になると、委員会では卒業判定、進級判定が主たる業務となりますが、退学や休学する学生の認定も多く、一抹の寂しさを覚えます。そして、特に今年度は、4年次で実習単位の認定がなされずに卒業できない学生が目立っていました。状況を分析すると、やはり対人関係の構築に問題のある学生がこれまでがんばってきたけれど、最後の臨床実習で躓いてしまったという状況が多いようです。なんとか克服して、来年度には卒業してほしいと願っております。

大学院教育では、今年、修士課程で10名、博士課程4名の卒業が決まりました。今年度は、完成年度を過ぎたことから、学務関連の案件が全て、これまでの管理委員会から学務委員会に移行されて、論議されております。実際に学務委員会で引き継いで業務を行いますと、やはり細かいことでの調整、確認の必要な事項がまだ残されていると感じます。その中で特に最近、重要と感じたのは、後期（博士）課程の論文の公表をどのようにチェックしてゆくかという問題です。医学専攻の博士課程では、提出論文が既に英語で公表された論文であることが博士号申請の条件となっていますが、保険学専攻では、審査の段階での論文の公表が必須条件とはなってはいませんが、従って、博士号を終了した後に、論文が正しく公表されているかをきちんと組織として確認しておく必要があると考えますが、そのシステムは確立しておりません。幸い、昨年度の博士論文3篇は、しかるべき雑誌に公表されていて、問題は生じていませんでしたが、次年度からは学務委員会が責任をもって調査、報告を行っていく必要があると考えております。

最期に、この場を借りて、学務委員会活動への日頃の皆様のご協力に心より感謝申し上げます。平成25年度が、保健学専攻科のさらなる発展の年となることを願っております。



## 平成24年度入学試験について

入試委員長

水 沼 秀 夫

昨年（2011年）は、後期日程試験の前日に東日本大震災に見舞われ、停電で被害の全容もわからず、不安の中で試験が行われ、受験できなかった志願者の救済のため追試験も実施するという波乱の年でしたが、平成24年度入学試験は、平成23年8月27日（土）の3年次編入学試験を皮切りに、9月末の大学院博士前期課程、博士後期課程の入学試験を経て、推薦入学試験、一般選抜の前期日程と後期日程まで支障なく執り行われ、4月にはそれぞれの入試の合格者を、晴れて秋田大学の保健学科および大学院保健学専攻の新入学生として迎え入れることが出来ました。

学部生の入学試験は、先ず3年次編入学試験が看護学専攻13名の受験者に対して行われ、8名が入学しました。理学療法学専攻、作業療法学専攻においては、本年度も出願者がありませんでした。

推薦入学試験は大学入試センター試験を課す推薦入試Ⅱを、各高校から推薦された生徒（看護学専攻は各高校から3名以内、理学療法学専攻と作業療法学専攻は人数制限なし）を対象に看護学専攻は面接、理学療法学専攻と作業療法学専攻は小論文試験と面接が保健学科を試験場にして実施されました。看護学専攻は48名の受験者に対して15名、理学療法学専攻は23名の受験者に対して6名、作業療法学専攻は10名の受験者に対して6名が合格しました。昨年と比べると、受験者数は看護

学専攻が昨年と同数、理学療法学専攻は3名減、作業療法学専攻は4名減でした。

一般選抜前期日程試験は、2月25日に、3専攻ともに英語と面接による個別学力検査が行われました。看護学専攻は、志願者115名、受験者95名、合格者44名、理学療法学専攻は、志願者23名、受験者20名、合格者10名、作業療法学専攻は志願者30名、受験者23名、合格者10名でした。

後期日程試験は、3月12日に小論文試験と面接で個別学力検査が行われました。看護学専攻は、志願者116名、受験者33名、合格者15名、理学療法学専攻は、志願者31名、受験者13名、合格者2名、作業療法学専攻は志願者56名、受験者24名、合格者4名でした。前期日程と後期日程を合わせた一般選抜の志願者数、受験者数は、昨年と比べて、3専攻共に減少しました。特に理学療法学専攻の減少はやや大幅でした。

18歳人口の減少が続いており、公私立大学医療技術系学部の新増設による受験生の奪い合いなどで優秀な学生を確保するための環境は年々厳しくなりつつあります。受験生・保護者や高校教員に対する秋田県内外に秋田大学保健学科の良さを知ってもらい、多数の人に受験してもらうために、県内外での大学説明会出席や高校訪問などなお一層力を入れると共に、教育の一層の充実を図ることがますます重要となります。



## 平成24年度FD講演会について

FD委員会委員長  
大友 和夫

ファカルティ・ディベロプメント (Faculty Development, FD; 能力開発) は、広義には、広く研究、教育、社会的サービス、管理運営の各側面の機能の開発であり、狭義には、主に諸機能の中の教育に焦点を合わせ、教育の規範構造、内容 (専門教育と教養教育)。カリキュラム、技術に関する教員の資質の改善を意味します。具体的な例を挙げますと、①大学の理念・目標を理解するワークショップ、②ベテラン教員による新人教員への指導、③教員の教育法 (学習理論、授業法、討論法、学業評価法、教育機器利用法、メディア・リテラシーの習熟) を改善するための支援プログラム、④カリキュラム開発、⑤学習支援 (履修指導) システムの開発、⑥教員の倫理規定と社会責任の周知などが上げられます。

一昨年と昨年は質的研究について2名の専門の先生から講演をいただき、これからの研究の方向性について学びました。今年度は、視点を変えて教育に焦点を合わせ、本学の医学部総合地域医療推進学講座の長谷川仁志先生を迎え、「秋田から発信するこれからの医師・医療者育成教育の新展開2013」をテーマに講演していただきました。

内容は以下の通りです

1. 世界から見た日本の国情 – ガラパゴス諸島といわれてきた日本の医学教育 –
2. 医療者育成教育のエッセンス – 最近の展開とこれから –

- 1) 基礎から臨床まで、入学直後から症例・事例ベースの統合学習の重要性
  - 2) すぐできるPBL (problem based learning)・TBL (team based learning)・レクチャーのコンビネーションカリキュラム
  - 3) プロフェッショナルリズム評価 (PMEX) を実習に応用する
  - 4) 教員の負担を最小限に診療参加型臨床実習を充実するポイント
  - 5) すぐできる客観的臨床実技試験OSCE実施の意義とポイント
  - 6) 必須シミュレーション教育の有用性 – 基本手技～先端チーム医療まで –
3. 秋田大学医学部の1年生からの取り組みと今後の多職種連携教育の展開を考える  
講演は先生の様々な経験に基づいたお話でした。中でも強調されたお話は、第一に、コミュニケーション能力をいかに習得させるかということでした。医療者は人と接する職業である以上コミュニケーションをとることが大切で、そのためには様々な場面を想定した訓練が必要で、グループ学習の中で学ぶことが肝心である。第二に、患者中心の医療を実現できる医療者となるために、多職種間の連携が大切で、しかも、倫理観のしっかりとした人格・姿勢・態度を身につけることである。具体的には、実際の臨床現場から症例・事例ベースではじまる基礎と臨床の統合である。そして、地域総合医療としての急性期か

ら考える在宅医療にも触れられ、この3月からは本学附属病院でも在宅支援外来開始するとの紹介がありました。

今回のFD講演会に参加した先生方からは、早急に改革を目指す必要があるなどの意見が多くあがり、一定の成果が得られたもの

と考えます。今後は実践のための一歩を早急に踏み出すことが重要だと考え、教職員一丸となり、考えていきたいと思えます。講演していただきました長谷川先生本当にありがとうございました。



## 天上の海 — 思い出の山旅 その4 幌尻岳 —

理学療法学専攻

岡田 恭 司

北海道のほぼ中央部に聳える広大な日高山脈、その最高峰が幌尻（ポロシリ）岳である。幌尻とはアイヌ語で「大きな山」という意味で、長い年月を経て氷河に削り取られてできたカールを4つも有しており、その昔、頂上部にはアザラシ、トドなどの海の生き物が住み、流れる川では昆布が採れたという「天上の海」伝説に彩られている山である。伝説の類に無性に弱い私にとって、幌尻岳は長い間、憧れの山であった。ただ、遠い山でもあった。公共交通機関などはなく、町から離れた国道から未舗装の林道を20Kmも走らなければならず注釈、さらに車止めのゲートから林道を2時間歩いて取水ダムに至り、そこから渡渉を繰り返しながら3時間かけて額平川沿いを登り、ようやく登山道が始まるという。雨で川が増水すれば、入山も下山も難しい行程であり、なかなか最初の一步を踏み出せないでいた。

2009年7月中旬、札幌医大のワングル部から、「幌尻岳に行くので一緒に行きませんか」と願ってもない誘いが届いた。彼らとは札幌近郊の山を一緒に登ったり、彼らが秋田の山

に来た時には軍資金を渡してあげたりと交友がある。絶好の機会であり、有難く参加させてもらうこととした。新千歳空港から迎いの車に便乗させてもらい、林道を歩き、暗くなってから取水ダム付近に先発隊が用意してくれたテントに潜り込んだ。明日はいよいよ沢登りだ、とこれも用意してもらった沢足袋を履いてみたりして、興奮状態で眠りについた。しかし翌朝、やや強い雨音で目が覚めた。額平川を下見に行くと増水しており、これでは渡渉を繰り返すのは危ない。撤退と決め、とほとほと林道を戻り車に乗り込んだ途端、経験したことのないような土砂降りとなった。激しい雨の中、なぜ登れなかったのかと考えていた。答えは簡単だった。人に頼りすぎの登山はうまく行かないのである。これまでの山でもそうだった。自力で秋田からこの地に至り、自分でテントを担いで登らなければ「天上の海」への道は開けない、そう決意した。

北海道から戻って10日もしない8月初め、呆れ顔の女房に見送られながら、秋田港からフェリーに乗り込んだ。幌尻の林道へ車を進め、20Kmの道のりを1時間以上かけて走り、

ようやく車止めのゲートへ到着した。今日からの天気予報は良いが、昨日までの雨が気になる。林道を速足で歩き、昼頃に額平川へ入った。幸い膝程度の水量で、用意の沢足袋は滑らず歩きやすく、沢登り用のズボンも濡れを気にせず歩け快適であった。何度川を横切ったか忘れてしまった頃、沢の上流部にある幌尻山荘に辿りついた。

小さな避難小屋は登山客で満員であった。管理人と少し世間話をして打ち解けてから恐る恐る、「ここにテントを張ってもよいでしょうか」と聞くと、国定公園内なので本当はダメだがと言いながら、「あそこに張って」と許可してくれた。込み合った山小屋に比べ、一人のテントは過ごしやすい。用意の切り餅やみそ汁などを腹一杯食べ、早々に寝袋に潜り込んだ。小屋の外なので、ヒゲマが少し怖かったが、疲れと満腹感で知らないうちに眠りこんでいた。

翌朝は3時過ぎに起き出して朝食を準備した。途中で炊飯などする時間はとれそうにないので、携帯食も準備し、5時頃に歩き始めた。明るくなってゆく林の中を上へと進んでいく。歩きやすい道で昨日の沢歩きが嘘のように静かな道である。たくさんのエゾアズマギクが咲いている。やがて明るい尾根道に出た。広大な北カールが目の前に広がっている(図1)。登山道はカールを巻くように、稜線に沿ってつけられている。雄大で美しい風景に何度も見とれてしまった。

頂上へは小屋から2時間半ほどで辿り着いた。まだ朝早く、見渡す限り私一人である。北の方には、日高の山並みが遥かに連なって見えた(図2)。ああ、ここは「天上の海」なのだと思った。今にも視界の端っこにアザラシが現れそうな、そんな気持ちになってしまう。快晴の頂上で茫然と過ごすうち、三木清の人生論ノートの一節を思い出した。「鳥

の歌ふが如く、おのづから外に現はれて、他の人を幸福にするものが眞の幸福である」。中学生の頃、父親代わりだった叔父に教えてもらった一節である。深い意味も分からず、そんな善人みたいなこと、と反発した気持ちを覚えたものだが、今思えば叔父は、自分勝手に思慮の浅い甥を心配して教えてくれたのだろう。私を幸福な気持ちに誘ってくれるこの広大な「天上の海」に立ち、叔父に改めて感謝した。

カールのはるか下の登山道に人の姿が見え始めた頃、ようやく下山しなければならない時間であることに気が付いた。できれば山中にもう一泊し、七つ沼カールまで足を伸ばしたかったのだが、仕事のスケジュールを考え断念した。下山時この山は緊張が途切れることがない。かつて昆布が流れていた額平川をしっかりと下り帰らなければならない。無事に帰って、いつか再び「天上の海」を訪れよう、そう自分に言い聞かせつつ、花の咲き乱れる登山道を下り始めた。

注：2012年からこの20 Kmの林道は、保全の目的で一般車の進入が禁止され、期間限定でシャトルバスが運行されるようになった。



図1．幌尻岳の北カール。左端が頂上。



図2．幌尻岳頂上から北の方角の眺め。日高山脈が連なって見える。

# 新任教員紹介



工藤 直子

保健学専攻 母子看護学講座 母性看護学分野

2012年4月に母子看護学講座に着任致しました。母校で働くことができる喜びをかみしめております。後輩でもある学生のみなさんと共に学び、一歩一歩成長してまいりたいと思っております。

どうぞよろしくお願いたします。

---



久米 裕

保健学専攻 作業療法学講座 臨床作業分野

平成24年度4月から医学部保健学科作業療法学専攻の助教として新任しました久米裕（クメユウ）と申します。専門分野は精神科作業療法で精神障害作業治療学，精神障害作業療法評価法演習の講義または実習を担当させて頂いております。宜しくお願いたします。

---

## 平成24年度秋田大学医学部保健学科入学試験実施状況

専攻	募集人員						志願者数					受験者数				
	推薦Ⅱ	前期	後期	社会人	合計		推薦Ⅱ	前期	後期	社会人	合計	推薦Ⅱ	前期	後期	社会人	合計
看護学	計	15	40	15	-	70	48	115	116	-	279	48	95	33	-	176
	男 女	- -	- -	- -	- -	- -	5 43	24 91	20 96	- -	49 230	5 43	20 75	5 28	- -	30 146
理学療法学	計	6	10	2	-	18	23	23	31	-	77	23	20	13	-	56
	男 女	- -	- -	- -	- -	- -	13 10	14 9	22 9	- -	49 28	13 10	12 8	8 5	- -	33 23
作業療法学	計	5	10	3	-	18	10	30	56	-	96	10	23	24	-	57
	男 女	- -	- -	- -	- -	- -	1 9	11 19	29 27	- -	41 55	1 9	10 13	17 7	- -	28 29
合計	計	26	60	20	-	106	81	168	203	-	452	81	138	70	-	289
	男 女	- -	- -	- -	- -	- -	19 62	49 119	71 132	- -	139 313	19 62	42 96	30 40	- -	91 198

専攻	合格者数						辞退者数					入学者数				
	推薦Ⅱ	前期	後期	社会人	合計		推薦Ⅱ	前期	後期	社会人	合計	推薦Ⅱ	前期	後期	社会人	合計
看護学	計	15	44	15	-	74	0	2	2	-	4	15	42	13	-	70
	男 女	1 14	8 36	1 14	- -	10 64	0 0	0 2	0 2	- -	0 4	1 14	8 34	1 12	- -	10 60
理学療法学	計	6	10	2	-	18	0	0	0	-	0	6	10	2	-	18
	男 女	2 4	6 4	1 1	- -	9 9	0 0	0 0	0 0	- -	0 0	2 4	6 4	1 1	- -	9 9
作業療法学	計	6	10	4	-	20	0	0	1	-	1	6	10	3	-	19
	男 女	0 6	2 8	1 3	- -	3 17	0 0	0 0	1 0	- -	1 0	0 6	2 8	0 3	- -	2 17
合計	計	27	64	21	-	112	0	2	3	-	5	27	62	18	-	107
	男 女	3 24	16 48	3 18	- -	22 90	0 0	0 2	1 2	- -	1 4	3 24	16 46	2 16	- -	21 86

## 平成24年度日本学生支援機構奨学生数

区分	人数
第一種奨学生（無利息）	96名
第二種奨学生（有利息）	145名

## 平成24年度卒業生進路状況

平成25年4月現在

専攻名	就職者数						進学者数						その他	合計
	県内		県外		計		県内		県外		計			
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
看護学専攻	6	28	7	32	13	60	0	1	0	3	0	4	1	78
理学療法学専攻	6	1	3	4	9	5	2	0	0	0	2	0	0	14
作業療法学専攻	3	11	1	1	4	12	0	2	0	0	0	2	1	17
計	15	40	11	37	26	85	2	3	0	3	2	6	2	109

理学療法学専攻及び作業療法学専攻の県内進学者は、就職進学者で就職者数にも含まれている。



## 平成24年度秋田大学医学部保健学科後援会 決算書

収 入 額 5,001,969円

支 出 額 4,193,011円

差引残額 808,958円 (次年度へ繰越)

### 収入の部

項 目	予 算 額	決 算 額	差引増減	摘 要
前年度より繰越	1,301,481	1,301,481	0	
会 費	4,200,000	3,680,000	△ 520,000	@40,000×88名 @20,000×8名
雑 収 入	500	20,488	19,988	預金利息, 模試受験料 (卒業生2名)
計	5,501,981	5,001,969	△ 500,012	

### 支出の部

項 目	予 算 額	決 算 額	差引増減	摘 要
学 部 協 力 費	380,000	265,584	114,416	臨床実習指導者連絡協議会, 特別講演会等補助, 教育賞 (H24)
課外活動助成費	200,000	180,000	20,000	団体助成 (9団体)
行 事 助 成 費	800,000	678,686	121,314	新入生オリエンテーション, 見学実習・解剖体火葬時バス代
施設見学謝礼	220,000	300,085	△ 80,085	実習施設見学謝礼
会 議 費	150,000	125,754	24,246	総代会・理事会
広 報 活 動 費	300,000	246,890	53,110	後援会だより (No.22), 送料
臨地臨床実習費	150,000	150,000	0	実習指導経費, 車賃
国家試験対策経費	1,500,000	1,431,340	68,660	国家試験(模擬)受験料, 国家試験関係図書
卒業祝賀会経費	800,000	694,160	105,840	卒業祝賀会, 卒業記念品, 卒業記念集合写真
雑 費	50,000	25,723	24,277	ハガキ代, 切手代
予 備 費	951,981	94,789	857,192	振込手数料, 送料, 弁当代
計	5,501,981	4,193,011	1,308,970	

## 平成25年度秋田大学医学部保健学科後援会 予算書

収 入 額 5,009,458円

支 出 額 5,009,458円

差 引 残 額 0円

### 収入の部

項 目	前年度予算額	本年度予算額	前年度比	摘 要
前年度より繰越	1,301,481	808,958	△ 492,523	
会 費	4,200,000	4,200,000	0	@40,000×100名 @20,000×10名
雑 収 入	500	500	0	預金利息
計	5,501,981	5,009,458	△ 492,523	

### 支出の部

項 目	前年度予算額	本年度予算額	前年度比	摘 要
学 部 協 力 費	380,000	500,000	120,000	臨床実習指導者連絡協議会, 特別講演会等補助, 教育賞
課外活動助成費	200,000	200,000	0	団体助成 (8 団体), 学部長表彰
行 事 助 成 費	800,000	800,000	0	新入生オリエンテーション, 見学実習・解剖体火葬時バス代
施設見学謝礼	220,000	300,000	80,000	実習施設見学謝礼
会 議 費	150,000	100,000	△ 50,000	総代会・理事会
広 報 活 動 費	300,000	300,000	0	後援会だより (No.23), 送料
臨地臨床実習費	150,000	0	△ 150,000	(学部協力費とする)
国家試験対策経費	1,500,000	1,500,000	0	国家試験(模擬)受験料, 国家試験関係図書
卒業祝賀会経費	800,000	800,000	0	卒業祝賀会, 卒業記念品, 卒業記念集合写真
雑 費	50,000	50,000	0	電報料, ハガキ代, 切手代
予 備 費	951,981	459,458	△ 492,523	振込手数料, 送料他
計	5,501,981	5,009,458	△ 492,523	

## 平成25年度秋田大学医学部保健学科後援会役員・総代名簿

役職名	氏名	学 生		
		専攻	氏名	
会 長	丹 羽 誠	作業療法	歩	
副 会 長	伊 藤 和 男	作業療法	愛 依	
〃	熊 谷 明	理学療法	萌 生	
理 事	佐 藤 透	看 護	麻衣子	
〃	福 士 直 人	看 護	早 織	
〃	福 田 芳 晴	看 護	結	
〃	諏 訪 崇	作業療法	恵利香	
監 事	小 泉 典 彦	看 護	恵里子	
〃	渡 辺 文 孝	看 護	泰 代	
総 代	4 年 次	(小 泉 典 彦)		
	〃	(渡 辺 文 孝)		
	〃	小田嶋 剛	理学療法	鷹 哉
	〃	(伊 藤 和 男)		
	3 年 次	(佐 藤 透)		
	〃	田 口 暁	看 護	瑞 季
	〃	(熊 谷 明)		
	〃	(丹 羽 誠)		
	2 年 次	(福 士 直 人)		
	〃	(福 田 芳 晴)		
	〃	新 出 康 史	理学療法	卓 斗
	〃	(諏 訪 崇)		
	1 年 次	木 村 愛 彦	看 護	真 優
	〃	村 雲 伸 一	看 護	爽 香
	〃	田 中 等	理学療法	里 香
	〃	三 浦 善 人	作業療法	望

## ○顧問

氏 名	役 職 名
大 友 和 夫	保健学科長・教授
篠 原 ひとみ	看護学専攻主任・教授
工 藤 俊 輔	理学療法学専攻主任・教授
石 川 隆 志	作業療法学専攻主任・教授

## 大学の行事等 (平成24年4月～平成25年3月)

- |    |            |  |
|----|------------|--|
| 24 | 4. 1 (日)   | 前期開始                                     |
|    | 4. 2 (月)   | OT 4年次ガイダンス (午前)                         |
|    | 4. 3 (火)   | 学生定期健康診断 (2・3・4年次)                       |
|    | 4. 4 (水)   | 2年次以上ガイダンス (午前)                          |
|    | 4. 5 (木)   | 平成24年度入学式 (秋田県民会館) 新入生ガイダンス (午後)         |
|    | 4. 6 (金)   | 前期授業開始                                   |
|    | 4. 19 (木)  | 学生定期健康診断 (新入生)                           |
|    | 6. 1 (金)   | 秋田大学創立記念日 (授業日)                          |
|    | 7. 28 (土)  | 秋田大学オープンキャンパス                            |
|    | 8. 10 (金)  | 夏季休業開始 (9月30日まで)                         |
|    | 8. 24 (金)  | 3年次編入学試験                                 |
|    | 9. 21 (金)  | 3年次編入学試験合格者発表                            |
|    | 9. 27 (木)  | 大学院医学系研究科保健学専攻 (博士前期・後期課程) 入学試験          |
|    | 9. 30 (日)  | 前期終了                                     |
|    | 10. 1 (土)  | 後期開始                                     |
|    | 10. 10 (水) | 大学院医学系研究科保健学専攻 (博士前期・後期課程) 入学試験合格者発表     |
|    | 12. 8 (土)  | 大学院医学系研究科保健学専攻 (博士前期) 入学試験 (第2次募集)       |
|    | 12. 25 (火) | 大学院医学系研究科保健学専攻 (博士前期) 入学試験 (第2次募集) 合格者発表 |
|    | 12. 26 (水) | 冬季休業開始 (1月8日まで)                          |
|    | 12. 28 (金) | 仕事納め                                     |
| 25 | 1. 4 (金)   | 仕事始め                                     |
|    | 1. 19 (土)  | 大学入試センター試験 (20日まで)                       |
|    | 1. 25 (金)  | 入学試験 (推薦入学Ⅱ)                             |
|    | 2. 12 (火)  | 入学試験合格者発表 (推薦入学Ⅱ)                        |
|    | 2. 14 (木)  | 助産師国家試験                                  |
|    | 2. 15 (金)  | 保健師国家試験                                  |
|    | 2. 17 (日)  | 看護師国家試験                                  |
|    | 2. 20 (水)  | 春季休業開始 (4月3日まで)                          |
|    | 2. 24 (日)  | 理学・作業療法士国家試験                             |
|    | 2. 25 (月)  | 入学試験 (前期日程)                              |
|    | 3. 6 (水)   | 入学試験合格者発表 (前期日程)                         |
|    | 3. 12 (火)  | 入学試験 (後期日程)                              |
|    | 3. 21 (木)  | 入学試験合格者発表 (後期日程)                         |
|    | 3. 22 (金)  | 平成24年度卒業式 (秋田県民会館) 卒業祝賀会 (ビューホテル)        |
|    | 3. 25 (月)  | 保健師・助産師・看護師国家試験合格者発表                     |
|    | 3. 29 (金)  | 理学・作業療法士国家試験合格者発表                        |
|    | 3. 30 (土)  | 後期終了, 学年終了                               |
|    | 3. 30 (土)  | 後援会総代会・理事会                               |

## 秋田大学医学部保健学科後援会会則

### (目的及び事務所)

第1条 本会は秋田大学医学部保健学科（以下「保健学科」という。）の教育活動に協力・援助することを目的とし、事務所を本学部に置く。

### (会 員)

第2条 本会は、保健学科に在学する学生の父母をもって組織する。

### (事 業)

第3条 本会の目的を達成するために次の事業を行う。

- 一 保健学科整備に伴う諸事業の援助・後援
- 二 学生の教育活動の援助・後援
- 三 保健学科と家庭との連絡
- 四 その他本会の目的を達成するために必要な事業

### (役 員)

第4条 本会に次の役員を置く。

- 一 会 長 1名 会を代表し、会務を総括する。
- 二 副会長 2名 会長を補佐し、会長不在のときその職務を代行する。
- 三 理 事 4名 理事会を構成し、事業の執行、運営に当たる。
- 四 監 事 2名 会計を監査する。

第5条 役員は総代会で選出し、任期は1年とする。

### (総代会)

第6条 本会に総会に代わる組織として総代会を設ける。総代の選出は次のとおりとする。

- 一 総定員 16名（各学年4名ずつとする。）
- 二 総代は役員を兼ねることができる。

第7条 総代会は毎年1回開催し、次の事項を審議する。

- 一 予算の議決
- 二 決算の承認
- 三 事業の報告
- 四 役員を選出
- 五 その他必要事項

なお、必要に応じ臨時総代会及び総会を開催することがある。

### (理事会)

第8条 本会の事業執行機関として理事会を置く。理事会は会長、副会長及び理事をもって構成し、総代会の議決事項の執行並びに会の運営に当たる。

### (会の招集)

第9条 総代会（総会を含む。）及び理事会は会長がこれを招集し、その議長となる。会議は原則として出席会員をもってこれを開き、その過半数をもって議決する。ただし、必要やむを得ない事情のときは文書等によって意見を聴し、会議に代えることがある。

### (顧 問)

第10条 本会に顧問を置き、保健学科長及び各専攻主任をもって充てる。

### (職 員)

第11条 本会に次の職員を置く。

書記若干名 書記は総代会の承認を経て会長が委嘱し、庶務会計の事務に当たる。

### (会 費)

第12条 本会の会費は、40,000円（3年次編入学生は20,000円）とし、原則として入会時に納入するものとする。納入した会費は返還しない。

### (会計年度)

第13条 本会の会計年度は毎年4月に始まり翌年3月31日に終わる。

### (補 則)

第14条 本会則の変更は総代会の議決によらなければならない。

#### 附 則

- 1 この会則は平成2年4月12日から施行する。
- 2 第6条の規定にかかわらず、総代の数は、平成2年度は4名、平成3年度は8名とする。

#### 附 則

- 1 この会則は平成14年12月20日から施行する。
- 2 第6条の規定にかかわらず、総代の数は、平成17年度までは12名とする。

#### 附 則

この会則は平成17年2月1日から施行する。

#### 附 則

この会則は平成22年4月1日から施行する。

後援会だより 通巻23号 2013. 4

---

発行 秋田市本道一丁目1の1  
秋田大学医学部保健学科  
後援会

☎ (018) 884-6543

---